

## 環境文明社会づくり あれこれ(8)

加藤 三郎

### 源流(8)

国連人間環境会議は6月5日から開催されるので、私たち事務方は6月2日、東京・羽田を発ち、当時西欧への航空路はアラスカ経由だったので、今よりかなり時間をかけてストックホルムに入った。この会議は、公害に揺れていた日本と同様、工業化を推進していた先進国、さらに工業開発に後れを取り焦っていた途上国にとっても、初めての本格的な環境会議となったので、ストックホルムには大勢の人々が集まってきた。日本からは環境庁はもとより、外務省、経産省、農林水産省等からも多数参加し、特に外務省にとっては、国内政治を反映してか、本省はもとより、ニューヨーク、ジュネーブ、パリの政府代表部からも大使クラスを含め何人も参加し、当時としては大型の代表団であった。

それに加え、環境庁記者クラブや駐欧州特派員など沢山の記者がストックホルムに参集した。当時、国連会議などにはほとんど外信部の日本人の記者が対応していたと思うが、こればかりは社会部の中

心とする環境庁記者クラブから大勢が参加した。

その中には、毎日新聞の原剛記者(論説委員を経て現早稲田環境塾長、当会理事)もいた。それに加え公衆衛生院の鈴木武夫先生などの学識者が顧問として参加しており、毎朝開かれる日本代表団の全体ミーティングはかなりの賑わいとなった。

そのような中で私が何を貢献したかといえば、外交面は殆どゼロで、もっぱら日本国内向けの報告や同行記者たちへのブリーフィング、環境省から出席した大石武一大臣や高官たちへの説明や資料作りなどに追われていたといってもよい。これまで詳しく説明してきたように、この会議のために3年ほどの準備期間を経て練り上げてきた人間環境宣言案と、各国政府やWHO、FAOなどの国連諸機関が人間環境のために実施すべき行動計画の勧告案を委員会ごとに分かれて審議し、最終日に一括して採択することが任務であったが、私は残念ながらこれらの最終成文づくりについて実質的な貢

献はしていない。

なぜできなかったか。一つは、多国間(マルチ)での国際会議にそれまで経験がなかったこと、もう一つは会議場で飛び交う英語を中心とする外国語を十分に聴き取り、即座に当方の見解を表明することが出来なかったからだ。実は、私自身は学部、大学院を通して英語の文献は、一年先輩の松尾友矩さん(東京大学名誉教授、東洋大学学長、当会理事)などと一緒に沢山読んできたし、英語能力検定一級も取得していたが、英語での厳しい交渉経験はなく、まして国連会議で飛び交う英語についていき、意見を述べることの難しさを痛感した。

このような能力はやはり外交官は強く、その中にはジュネーブの代表部に厚生省から派遣されていた渡辺修さん(後に環境庁事務次官、OECC理事長、当会会員)もおられた。この苦い経験を通して、私は語学力を含め外交センスを磨くことを自らに課した。

